

2024年7月28日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教3「神の御子の栄光」

詩編132：13～18、ヨハネ1：14～18

「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」（14節）これは、言（ことば）、神さまのご意思が、肉（サルクス）、わたしたちの死んだら塵に帰るような、弱く脆い人間の肉体をお取りになられ、この地上に現れてくださったことを意味します。教会では、このことを「受肉」と申します。どうして神さまの言葉、ご意思が、わざわざ「肉」になる必要があるのでしょうか。このヨハネ福音書が成立されていく時代に、グノーシス主義という思想が影響を持ち始めます。これは当時の教会にとって大変な脅威となりました。グノーシス主義を説明するだけでも多くの時間と労力を必要としますから、これを説教の中で詳しく扱うことはいたしません、もともとグノーシスとは「知識」という意味で、啓示によって、神さまに対する真の知識を得ることが救いであるとしています。グノーシス主義によりますと、善と悪、霊と肉というようにすべてを二元論的に考えて、この世は悪であって、この世の事柄はすべて否定されていきます。当然、肉体を使って生きる生活も否定されていくことになる。それゆえ救いは、この世と切り離され、精神化されていきました。

問題なのは、それによってイエスさまの存在がこの世と切り離されていくことが起こります。つまりイエスさまの受肉が否定され、イエスさまの肉体は仮の姿であった、本当に人間になられたのではないという考え方が生まれてきます。これを「仮現説」（ドケティズム）と言います。20世紀中頃にエジプトでナグ・ハマディ文書というのが発見されますが、それによってグノーシス主義に影響を受けた「キリスト教グノーシス」と呼ばれるものが、このヨハネの教会の時代から存在していたことが明らかになりました。

それに真っ向から対抗したのが、ヨハネの教会です。イエスさまの人性を否定すれば、わたしたちの救いは根本から崩れてしまう。イエスさまの十字架の死、それによる罪の贖いはまったく意味をなさなくなってしまう。まことの神さまがまことの人として、この人類の罪を担い、ご自身の体を持って罪を贖ってくださった。そしてよみがえりと昇天によって、罪に勝利され、この存在を天、神さまの御国に引き上げ、つなぎとめてくださる。それゆえ受肉、十字架、復活、昇天という流れは重要です。わたしたちの存在、肉の脆い体をご自身の体を持って受け入れ、そして天に昇られる。だからこそ、わたしたちはこの地上においても、神さまの栄光を現して生きることができるのです。教会はそこに救いを見えています。ヨハネ福音書が、神さまの言葉が肉をお取りになられたことを言い表すのは、グノーシス主義の脅威の中で、このような教会の信仰を守るためであったと理解してよいでしょう。

今日のところに「父のふところにいる独り子」（18節）とあります。これはイエスさまのことだけではなく、わたしたちもそのふところに招かれています。そのために神さまはわたしたちと同じ肉体をお取りになられました。ふところ深くにわたしたちを受け止めてくださるのです。そこには深い神さまの愛があります。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（3：16）とある通り、わたしたちの存在、この肉を用いて生きる日々の歩みを重んじてくださるのです。それが受肉という形に現わされました。この救いが、わたしたちの地上の歩みに意味が与えます。だから、わたしたちはどのような時も諦めずに、希望を持ち続けることができるのです。すべてはこの信仰にかかっています。

今日のところを繰り返し読むときに、「見る」という言葉が心に留まります。「わたしたちはその栄光を見た」（14節）また「いまだかつて、神を見たものはいない」（18節）この「見る」というのは、信仰を考える上でも大変意義深いことです。ここにもグノーシス主義に対抗する意図があると思われませんが、それは何より神さまとの関係を示しています。そもそも人間は、神さまを見ることができない存在でした。それは罪があるからです。その創世記の物語でも約束を破った人間は「主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れた」（創世記3：8）とあります。まともに、面と向かって神さまを見られない。また今日のところにはモーセが出てきますが、モーセの召命のところでも「モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った」（出エジプト3：6）とあります。わたしたちも誰かに引け目を感じて目を合わせられない、面と向かって会えないということがあるでしょう。しかし、そのようなわたしたちが神さまを見る、その栄光を見ることができるとは、それはイエスさまによって罪を赦していただいたからに他なりません。赦されて神さまの御前に立つことができるようにされた。だから神さまを見るのです。それは神さまとの関係の回復を意味しています。

この神さまを見るということでは思い浮かべますのは、使徒言行録にあるステファノの殉教の場面です。「ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、『天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える』と言った」（7：55～56）とあります。ここにも「見る」という言葉がたくさん出てきます。神さまを見る、その栄光を見るというのは、夢心地とか、天にも昇るような心境ではありません。まさにこの時のステファノのように、最悪の状況の中で、人生の試練や逆境と言われるようなところでも神さまを見る。それこそ、ここに神さまはおられないと言い切れるような状況でこそ神を見る。そこにも神さまがおられることを体験するのです。それは神さまが肉体をお取りになられ、自らこの地上にご自身を示されたからこそ、可能なのではないのでしょうか。逆を言えば、わたしたちがどのようなときにも、試練のときにも、そこにも神さまを見ることができるようになるために、神さまはまことの人となられたのです。

ヨハネ福音書で、イエスさまがエルサレムに入られ、十字架を目前にしたときに、イエスさまは「人の子が栄光を受ける時が来た」（12：23）と言われました。十字架は栄光のときなのです。百人隊長がイエスさまの十字架に立会い、イエスさまが息を引き取られたのを見て、「本当にこの人は神の子だった」（マルコ15：39）と言いました。それはその十字架に神さまを見た、神さまの栄光を見たということでしょう。十字架にこそ、神さまの栄光は現われました。十字架こそ肉となられた神さまの言、ご意志が成し遂げられた場所なのです。わたしたちにはこの世で悩みがあります。しかし、それでも生きていけるのは、神さまがわたしたちを愛して、この世にイエスさまを通して、その栄光を現わしてくださったからです。この信仰がわたしたちのこの世での歩みを根底で支えるものとなるでしょう。

天の父よ。神さまはおられないと思われるときにも、そこにもあなたがおられる。そのためにあなたご自身が、わたしたちの弱く、卑しい肉の体をご自分のものとして担われました。そしてご自身のふところに受け止めて、神さまの御国につなぎ止めてくださいます。だからこそ、希望を持って、諦めずに歩むことができます。どんな試練の中でも、満ち溢れる恵みと真理を見ることができるようになります。主の御名によって祈ります。アーメン。